

<Capo+X>複合名詞にみる複数形態の生成構造と構成要素の機能関係

上野 貴史

(大阪女子短期大学)

Riassunto

I nomi composti che nel primo elemento presentano "capo" risultano essere una formazione produttiva delle parole nell'italiano moderno. La forma plurale di tali composti è però piuttosto complessa. Questo lavoro è inteso a mostrare il fatto che la complessità della forma plurale dei composti <capo+X> è causata da differenza sia nel processo generativo, sia nella funzione semantica, sia nelle regole di flessione. Per quanto riguarda il processo generativo, in italiano esistono Composti Larghi e Composti Stretti I, che sono generati dalle regole della formazione delle parole, e Composti Stretti II, che sono registrati nel lessico. Nei composti che in seconda posizione presentano un aggettivo, la flessione del plurale, come per gli altri composti <N+A>, appare tanto nella testa "capo", quanto nell'elemento rappresentato dall'aggettivo, secondo le regole della concordanza. Il risultato è che flettono entrambi gli elementi del composto. Nei Composti Stretti II, la flessione plurale appare nella desinenza del composto a causa della lessicalizzazione. Nei composti che hanno un nome in seconda posizione, è possibile operare una classificazione funzionale in composti di subordinazione (quando il secondo elemento indica la caratteristica lessicale di [-umano]) e di coordinazione (quando il secondo elemento assume la caratteristica lessicale di [+umano]). Generalmente la forma plurale dei nomi appare nella testa, tuttavia, nel caso dei composti coordinati è impossibile stabilire quale dei due elementi rappresenti la testa. Di conseguenza, i composti coordinati flettono entrambi gli elementi. Inoltre, quando i composti vengono usati come nomi femminili, l'elemento "capo", al plurale, risulta rimanere invariato. In questo modo, la forma plurale viene ad essere stabilita dalla funzione, dal processo generativo, e dal genere dei composti.

1. はじめに

第一要素(P₁)に *capo* を従える複合名詞(<capo+X>)¹⁾は、イタリア語において生産的な語形成の一つである。語彙体系上、派生語と比較して複合語がそれほど発達していないとされるイタリア語において²⁾、生産的に複合語生成が行われる *capo* は、特異な複合語要素³⁾であると言える⁴⁾。このような特異性に加えて<capo+X>複合語は、その複数形態の複雑さという点でも他の複合名詞と異なる点が多い。<capo+X>複合語における X の位置(P₂)には、一般的に、名詞(N)または形容詞(A)という語彙範疇が現れるが⁵⁾、特に、P₂ に名詞が現れる<capo+N>では、(1)のような四種類の複数形態が見られる(InfIは複数屈折形態素を示す)。

- (1) <capo+N>→ a. <capo-InfI+P₂> : *capiarma/ capipagina/ capiposto*
b. <capo+P₂-InfI> : *capogiri/ capoletti/ capoversi*
c. <capo-InfI+P₂-InfI> : *capibriganti/ capifacchini/ capigabbieri*
d. <capo+P₂> : *capobranco*⁶⁾/ *caposcalo*⁷⁾/ *caposesto*

(1a)と(1b)は、それぞれ P₁ と P₂ の要素末に屈折形態を持つものであり、(1c)は、P₁ と P₂ の両方に屈折形態が出現するものである。また、(1d)は、複数形に屈折形態が現れない不変化形であることを示している。このような複数形態の多様性から、イタリア語の文法書や語形成の研究においては、表層に現れる多様な複数形態を説明するため、<capo+N>複合語を他の複合名詞と区別し、一般的な<capo+N>複合語の複数形態生成規則を示した後に、例外を列挙するという形で記述されることが多い⁸⁾。しかしながら、このように<capo+N>複合語を他の複合名詞と区別して分析・処理する必要性に対して、その根拠を提示しているものは見あたらない。

そこで本稿では、まず、<capo+N>複合語を他の<N+N>複合語と区別して扱っている先行研究について検討を行い、その問題点を指摘する。そして、このような先行研究における問題点を踏まえた上で、<capo+X>複合語に適用される屈折規則を、複合語の生成構造と構成要素の機能関係という観点から、分析していくことにする。この際、イタリア語の語彙に機能する一般的な屈折規則を提案し、この規則が他の語彙と同様、<capo+X>複合語にも適用されていることを考察する。このことから、複合語に現れる複数形態が、語形成規則内部の「複数素性付加に関する条件」により屈折位置が決定され、この条件が複合語の生成過程と構成要素の機能関係に依存していることを指摘していきたい。

2. 先行研究における<capo+N>複合名詞の複数形態

<capo+N>複合語の複数形態を扱っている先行研究を、その説明の方法によって分類すると、①「構成要素の文法性」型、②「構成要素間の意味機能」型、③「構成要素間の意味機能と複合語の文法性」型、に整理することが可能であると思われる⁹⁾。それぞれの型における先行研究の記述では、全般的に、複数形態生成規則とそれに適応しない例外を列挙するという形をとるが、特に①の「構成要素の文法性」による説明では、数多くの例外を示す必要がある。例えば、坂本(1979: 60)では、「《capo+男性名詞》のときは、最後だけを-iにするもの、capoだけを-iにするもの、両方を-iにするものがあり、定まった規則は作りにくい」とあり、「構成要素の文法性」による説明の限界を示している。②と③は、構成要素における意味的主要部や構成要素間の機能関係により、<capo+N>複合語の複数形態が決定されるということが述べられている。②が③と異なる点は、③が構成要素の意味機能に加えて複合語の文法性を規則に入れるのに対して、②がそのようなものを例外として処理するところにある。ここでは、③の方法で説明を行っている Seriani(1989)を少し詳しく取り上げ、その妥当性を考察し、問題点を指摘していくことにする。まず、Seriani(1989)では、複合語における capo の意味の違いが、複合語内部における要素間の機能関係の相違に表出されるとしている。そして、<capo+N>複合語を capo が示す意味から分類し、それぞれ複数屈折の生起する位置が(2)のようになることを述べている。

(2) a. "x è il capo di y" → 男性名詞の場合: P₁に複数屈折

女性名詞の場合: 不変化

b. "x è capo tra x₁, x₂, x₃..." → P₂に複数屈折

c. "un capo-x" → P₂に複数屈折

(2a)は、capo が"colui che è a capo di qualcosa"「何かの先頭にいる人」というような意味を持つ従位(subordinativo)構造の複合語である。このような構造の<capo+N>複合語が男性名詞の場合には、P₁に複数屈折が起こり、女性名詞となる場合には、不変化となる。このグループに含まれる複合名詞として、(3)のようなものが例として挙げられる。

(3) 男性名詞: il capogruppo → i capigruppo/ il capopartito → i capipartito/ il caposquadra → i capisquadra/ il caporeparto → i capireparto

女性名詞: la caporeparto → le caporeparto/ la caposala → le caposala

(2a)における複数形態生成規則は、このグループにおけるほとんどの<capo+N>複合語に有効で

あるが、(4)のような例外が若干見られる。

(4) a. $\langle P_1+P_2-\text{Infl} \rangle$: la caporiona \rightarrow le caporione/ il caporione \rightarrow i caporioni¹⁰⁾

b. $\langle P_1-\text{Infl}+P_2-\text{Infl} \rangle$: il capocarico \rightarrow i capicarichi

(4a)における女性名詞 *caporione* と男性名詞 *caporioni* という複数形態は、文法性に関係なく、 P_2 に複数屈折が現れている。また、(4b)の *capicarichi* においては、複合語における両方の要素に複数形態が出現している。このような規則に当てはまらない複合語に対して、Serianni(1989)では、全く触れられていないが、例外として処理されると予想される。次に、*capo* が "colui che è a capo di qualcuno" 「誰かの先頭にいる人」という意味を持つ(2b)においては、*capo* が P_2 と同格的 (appositivo) 関係にあり、一語として認識されるため、 P_2 に複数形態が出現するとして、(5)のような例を挙げている。

(5) il capocontabile \rightarrow i capocontabili/ il capocuoco \rightarrow i capocuochi/ il caporedattore \rightarrow
i caporedattori/ la capoimpiegata \rightarrow le capoimpiegate/ la caporedattrice \rightarrow le caporedattrici

しかし、(2b)の意味を持つ $\langle \text{capo}+N \rangle$ 複合語に関しては、(6)のように $\langle P_1-\text{Infl}+P_2-\text{Infl} \rangle$ という複数形態をとるもののがかなり多く見られる。

(6) $\langle P_1-\text{Infl}+P_2-\text{Infl} \rangle$: il capocannoniere \rightarrow i capicannonieri/ il capomastro \rightarrow i capimastri/
il capocarcchiere \rightarrow i capicarcrieri/ il capofacchino \rightarrow i capifacchini

Serianni(1989)では、このような $\langle P_1-\text{Infl}+P_2-\text{Infl} \rangle$ の複数形態についての記述が見られないが、例外として処理するには、数量的にも無理があるように思える。続いて、(2c)における *capo* は、"ciò che si segnala tra altri oggetti omogenei come 'preminente', 'eccellente'" 「卓越・傑出したものとして、同種類間で目を引く物」を意味する。このような複合語は、(2b)と同様、機能的に同格的関係を持ち、(7)のように、複数形態は P_2 に起こるとされる。

(7) il capolavoro \rightarrow i capolavori/ il capoluogo \rightarrow i capoluoghi

これらに関しても、 P_1 に複数屈折が起こるもの(8a)、 P_1 と P_2 に複数屈折が起こるもの(8b)、不変化のもの(8c)のような例外を見つけることができる。

(8) a. $\langle P_1-\text{Infl}+P_2 \rangle$: il capoclassifica \rightarrow i capiclassifica

b. $\langle P_1-\text{Infl}+P_2-\text{Infl} \rangle$: il capotamburo \rightarrow i capitamburi

c. $\langle P_1+P_2 \rangle$: la capoclassifica \rightarrow le capoclassifica

このようなことから、(2)で示した Seriani(1989)における $\langle \text{capo}+N \rangle$ 複合語の複数屈折規則の説明

は、かなり多くの例外規則を必要とすることが予想される。これらの例外規則の必要性に加えて、さらに、(2)で分類された意味以外にも *capo* には、"inizio di qualche cosa"「何かの最初」という意味が存在する。Serrianni(1989)では、この意味における<capo+N>複合語の説明が欠如しているが、次に示すように、この場合も複数形態は多様に現れる。

- (9) a. <P₁+P₂-Infl> : il capostipite → i capostipiti/ il capoverso → i capoversi
b. <P₁-Infl+P₂> : il capoparto → i capi/parto/ il capostrada → i capi/strada
c. <P₁+P₂> : il capolinea → i capolinea/ la capolista → le capolista

(9)で示した *capo* の意味における屈折形態の多様性からも、複数形態の決定要因が *capo* の意味機能にあるとするのは、困難であると思われる。また、<capo+N>複合語に限らず、イタリア語の複合名詞には、複数形態が二種類以上存在するものが多くある。例えば、*il capotreno* は、*i capotreni* (<P₁+P₂-Infl>)と *i capitreno* (<P₁-Infl+P₂>)の二種類の複数形態が存在する。このような複数形態を持つ複合語に関して、Serrianni(1989)では、ほとんど言及されていない¹¹⁾。

以上、複数形態が、構成要素の意味機能と複合語の文法性に依存するという Serrianni(1989)の<capo+N>複合語の複数形態に関する説明を考察したが、特に問題として挙げられると思われることについて言及しておく。まず、一般的な複数形態生成規則に対する例外の多さについてである。このような多くの例外の存在は、どの語を例外として処理するかを決定するようなもの、例えば、話者の記憶や規則といったようなものが必要となる。しかしながら、一般規則の適用を受けるものと例外として処理されるものを区別する方法については、他の先行研究と同様、Serrianni(1989)では、全く示されていない。第二点目は、<capo+N>複合名詞にだけ適用する規則が本当に必要であるのか否かということである。確かに、<capo+N>複合名詞の複数形態は、他の複合名詞と比較すると複雑である。しかし、複数形態生成に関してだけ、<capo+N>複合名詞に機能する規則が存在するという考え方には、疑問が残る。また、このような特別な処理を行っているにも拘わらず、多くの例外を生じさせている。このような問題点に共通して見られる原因の一つとして、表層に現れる形態だけを分類していることが挙げられる。そこで、本稿では、このような問題点を解決するために、複合語の生成過程という観点を複数形態の決定要因に含めることによって、<capo+X>複合語に出現する複数形態を考察していく。このため、次に、複合語の生成に関係する屈折規則について、考察を進めていくことにする。

3. 語基と屈折規則

複合語は、語彙部門にある辞書から、語形成規則の適用を受け、出力(Output: Op)となって生成される。ここでは、辞書として登録される語形成規則の適用を受ける前の形式を語基(Base)と呼ぶ。それぞれの語基は、語彙項目として統語範疇・音韻情報・意味情報・形態情報などを持つ。語基の実体に関しては、文法理論や処理する言語の相違により、多様に位置付けられるが、本稿では、語レベルのものを語基と設定する¹²⁾。この場合、屈折変化の多いイタリア語の語彙において、語末の語幹母音を語基とするかどうかがしばしば問題となる¹³⁾。例えば、名詞 *libri* の生成は、語基を単数形態の[libro]と仮定すると、(10)のようになる。

(10) [libro] → [[libro]+i] → [libri]

この場合、屈折規則(Inflection Rules: IR)によって複数形態素である[+i]が付加された後、語幹母音である-oの削除規則が必要となる。また、派生規則(Derivation Rules: DR)によって生成されると考えられる *libraio* においても、接尾辞-aioの付加の後、語幹母音-oの削除規則が必要である¹⁴⁾。

このように、単数形態の語幹母音を含めた語を語基と設定すると、屈折や派生において、語幹母音の削除規則が必要となることから、本稿では、語幹母音を除いたものを *lexeme* (語彙素)とし、語幹母音は形態情報として辞書に登録されているという立場をとる。そこで、イタリア語における一般的な名詞の語幹母音である-o/-a/-eをそれぞれ-α/-β/-χという素性で表示し、*lexeme* にこれらの形態素性を含めたものを語基と設定する。例えば、(10)における *libri* は、語基[libr-α]が(11)のように規則適用を受け生成する。

(11) [libr-α] → [libr-i] → [libri]

このようなことから、屈折規則は、語が出力として現れる前に、必ず適用されなければならない義務的な規則となる。語基を[Ψ]、男性の語彙特性をM、女性の語彙特性をF、複数の素性を<+pl>と記述すると、イタリア語名詞における一般的な屈折規則は、(12)のように規定される。

(12) 名詞の屈折規則

- a. i) [Ψ-α]_{M/F} → [Ψ-o]_{M/F}
- ii) [Ψ-α]_{M/F(<+pl>)} → [Ψ-i]_{M/F}
- b. i) [Ψ-β]_{M/F} → [Ψ-e]_{M/F}
- ii) [Ψ-β]_{M/F(<+pl>)} → [Ψ-i]_{M/F}
- c. i) [Ψ-χ]_{M/F} → [Ψ-a]_{M/F}

$$\text{ii) } [\Psi-\chi]_{M(+pl)} \rightarrow [\Psi-i]_M$$

$$\text{iii) } [\Psi-\chi]_{F(+pl)} \rightarrow [\Psi-e]_F$$

(13)に、(12)の屈折規則が適用された具体例を示す。

$$(13) \text{ a. i) } [\text{libr}-\alpha]_M \rightarrow [\text{libr}-o]_M \rightarrow [\text{libro}]_M$$

$$\text{ii) } [\text{libr}-\alpha]_{M(+pl)} \rightarrow [\text{libr}-i]_M \rightarrow [\text{libri}]_M$$

$$\text{b. i) } [\text{fior}-\beta]_M \rightarrow [\text{fior}-e]_M \rightarrow [\text{fiore}]_M$$

$$\text{ii) } [\text{fior}-\beta]_{M(+pl)} \rightarrow [\text{fior}-i]_M \rightarrow [\text{fiori}]_M$$

$$\text{c. i) } [\text{sedi}-\chi]_F \rightarrow [\text{sedi}-a]_F \rightarrow [\text{sedia}]_F$$

$$\text{ii) } [\text{poet}-\chi]_{M(+pl)} \rightarrow [\text{poet}-i]_M \rightarrow [\text{poeti}]_M$$

$$\text{iii) } [\text{sedi}-\chi]_{F(+pl)} \rightarrow [\text{sedi}-e]_F \rightarrow [\text{sedie}]_F$$

規則的な語形変化を持つほとんどの名詞は、(12)の屈折規則によって生成されるが、実際は、これ以外にも多くの複雑な規則を必要とする。しかし、ここでは、本稿の分析に必要であると思われる屈折規則を提示するに留める。

4. <capo+X>複合語

複合語の複数形態は、3.で示した複数素性を持った屈折規則が、構成要素のどの位置に出現するかによって決定される。ここでは、複合語において複数素性が現れる位置を決定するものとして、「複数素性付加に関する条件」(Condition on Plural Features Assignment: PFA)を提案し、複合語の生成過程と構成要素の機能関係から、<capo+X>複合名詞について論じていくことにする。まず、ここで扱う<capo+X>複合語の構造を(14)のように記述する。

$$(14) \quad [[\text{capo}]_N [\text{P}_2]_N]_N$$

(14)の構造における P_2 の語彙範疇には、NとAがあるため、それぞれ区別して分析を進めていくことにする。

4.1. $[[\text{capo}]_N [\text{P}_2]_N]_N$

P_2 に形容詞が現れる $[[\text{capo}]_N [\text{P}_2]_N]_N$ は、 P_1 の capo が名詞であるため、<N+A>の語彙範疇からなる複合名詞である。<N+A>複合名詞の複数形態生成に関して、拙稿(1998)では、生成構造の違いから、複合語を Composti Larghi(CL)と Composti Stretti(CS)に分類して分析を行っている。各要素のアクセントを保持し、語形成規則の中の複合語規則(Compounding Rules: CR)の適用を

受ける CL は、主要部である名詞要素に屈折規則が適用され、同時に、名詞と形容詞の一致が生じることから、複合語の両方の要素に複数屈折が出現する。一方、構成要素の密着度が高くなり、 P_1 の要素のアクセントが欠如する結果、単純語と同様のアクセント規則を持つ CS については、CL と同様、語形成規則によって生成される CS I と、初めから辞書に登録されている CS II に分類される。CS II は、辞書に登録されていることから、単純語と同じく、語末に複数の屈折形態が現れることになる。〈N+A〉複合語の複数形態が規則適用を受けて生成される過程を表すと、(15)のようになる。

(15)	CL	CS I	CS II
Base	$[P_1]_N, [P_2]_A$	$[P_1]_N, [P_2]_A$	$[P_1P_2]_N$
CR	$[[P_1]_N##[P_2]_A]_N$	$[[P_1]_N+[P_2]_A]_N$	ϕ
PFA	$[[P_1]_{N<+pl>}##[P_2]_{A<+pl>}]_N$	$[[P_1]_{N<+pl>}+[P_2]_{A<+pl>}]_N$	$[P_1P_2]_{N<+pl>}$
IR	$[[P_1-Inf]_N##[P_2-Inf]_A]_N$	$[[P_1-Inf]_N+[P_2-Inf]_A]_N$	$[P_1P_2-Inf]_N$

(15)における複合語規則で生成される CL と CS I は、(16)のような〈N+A〉複合名詞における PFA に従うと考えられる。

(16) 〈N+A〉の語彙範疇からなる複合名詞の場合、主要部である名詞、そして形容詞の要素に〈+pl〉の素性を付加する。

例えば、CL の場合、語基として列挙される $[P_1]_N$ と $[P_2]_A$ が、複合語規則により $[[P_1]_N##[P_2]_A]_N$ となり、PFA によってそれぞれの要素に〈+pl〉の素性が付加された後、屈折規則の適用により、複数形態が生成される。一方、語形成規則によって生成されない CS II は、語基として登録されてある $[P_1P_2]_N$ が単純語における PFA によって、〈+pl〉の素性を付加し、屈折規則により複数形態が生成される。この単純語における PFA は、(17)によって示される。

(17) 単純語の名詞の場合、語に〈+pl〉の素性を付加する。

〈capo+A〉複合名詞も、(15)の〈N+A〉複合語と同じ過程によって生成される。

(18) a. *i capi ameni*/ *i capi scarichi*

b. *i capi/morti*/ *i capisaldi*/ *i capiscarichi*

c. *le capinere*¹⁵⁾/ *i capirossi*¹⁶⁾

(18a)で挙げた複合語は、各構成要素にアクセントを持つ CL であり、複数屈折が両方の構成要素に起こる。また、CS I に分類される(18b)の複合語も、両方の構成要素に複数屈折が起こって

いる。CL の *capi ameni* と CS I の *capimorti* の生成過程を記述すると、(19)のようになる。

(19)	Base	$[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{amen-}\kappa^{17}]_A$	$[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{mort-}\lambda^{18}]_A$
	CR	$[[\text{cap-}\alpha]_M \# [\text{amen-}\kappa]_A]_M$	$[[\text{cap-}\alpha]_M + [\text{mort-}\lambda]_A]_M$
	PFA	$[[\text{cap-}\alpha]_{M(\cdot, \text{pt})} \# [\text{amen-}\kappa]_{A(\cdot, \text{mas}/\text{pt})}]_M$	$[[\text{cap-}\alpha]_{M(\cdot, \text{pt})} + [\text{mort-}\lambda]_{A(\cdot, \text{mas}/\text{pt})}]_M$
	IR	$[[\text{cap-i}]_M \# [\text{amen-i}]_A]_M$	$[[\text{cap-i}]_M + [\text{mort-i}]_A]_M$
	Op	$[\text{capi ameni}]_M$	$[\text{capimorti}]_M$

(19)では、PFA によって主要部である P_1 と形容詞要素に $\langle +\text{pt} \rangle$ の素性が付加され、屈折規則において、 P_1 と形容詞要素に複数の屈折規則が適用される。一方、(18c)は、語形成規則により生成される複合語ではなく、単純語と同様、辞書に列挙されている CS II である。従って、複合語規則の適用は受けず、*capirossi* は、(20)のように、語末に(12a-ii)の屈折規則が適用される。

(20)	Base	$[\text{capiross-}\alpha]_M$
	PFA	$[\text{capiross-}\alpha]_{M(\cdot, \text{pt})}$
	IR	$[\text{capiross-i}]_M$
	Op	$[\text{capirossi}]_M$

このように、 $\langle \text{capo} + A \rangle$ 複合語は、他の $\langle N + A \rangle$ 複合語と同じように、複合語生成における内部構造の相違に基づいて、PFA によって複数形態が決定される。

4.2. $[[\text{capo}]_N \langle [P_1]_N \rangle_N$

2.で考察した Serianni(1989)における分析において、複雑な複数形態を示す $\langle \text{capo} + N \rangle$ 複合語の決定要因となるものは、*capo* の意味と複合語の文法性であった。これは、換言すると、 P_2 における名詞の統語素性と複合語全体の語彙素性が複数形態を決定する重要な要素であるということを示している。そこで、ここでは、複合語全体の語彙素性である文法性と、 $\langle \text{capo} + N \rangle$ 複合語の機能構造に関係する P_2 の下位範疇素性 ($\langle \pm \text{human} \rangle$) に注目し、分析を進めていく。

4.2.1. $P_2: \langle -\text{human} \rangle$

P_2 に $\langle -\text{human} \rangle$ (非人間名詞) の下位範疇素性を持つ $\langle \text{capo} + N \rangle$ 複合語は、*capo* の意味に関係なく、従位複合語 (*composti subordinazione*)¹⁹⁾ を形成する。まず、複合語が男性名詞となる場合において、 P_2 に $\langle -\text{human} \rangle$ の素性を持つ CL(21a) と CS I (21b) は、主要部である P_1 に複数屈折が起こる。

(21) a. il capo banda → i capi banda/ il capo-pattuglia → i capi-pattuglia/ il capo-reparto →

i capi-reparto/ il capo ufficio → i capi ufficio

b. il capobarca → i capi/barca/ il capomafia → i capi/mafia/ il capoarma → i capi/arma/

il capopezzo → i capi/pezzo/ il capopartito → i capi/partito

(21a)の *capi banda* と(21b)の *capibarca* の生成過程を記述すると、(22)のようになる。

(22)	Base	$[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{band-}\chi]_F$	$[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{barc-}\chi]_F$
	CR	$[[\text{cap-}\alpha]_M \# [\text{band-}\chi]_F]_M$	$[[\text{cap-}\alpha]_M + [\text{barc-}\chi]_F]_M$
	PFA	$[[\text{cap-}\alpha]_{M\langle +pl \rangle} \# [\text{band-}\chi]_F]_M$	$[[\text{cap-}\alpha]_{M\langle +pl \rangle} + [\text{barc-}\chi]_F]_M$
	IR	$[[\text{cap-i}]_M \# [\text{band-a}]_F]_M$	$[[\text{cap-i}]_M + [\text{barc-a}]_F]_M$
	Op	$[\text{capi banda}]_M$	$[\text{capibarca}]_M$

(22)では、いずれにおいても複合語規則により生成されたものが、PFAにより、 P_1 に $\langle +pl \rangle$ の素性を付加し、複数形態が生成されている。このように、 P_2 に $\langle -human \rangle$ の素性を持ち、語形成規則によって生成される $\langle \text{capo}+N \rangle$ 複合語は、主要部である P_1 に屈折が起こる。このようなことから、従位複合語は、一般的に、(23)のような PFA に条件付けられていると考えられる。

(23) $\langle N+N \rangle$ の語彙範疇からなる複合名詞が従位複合語である場合、主要部に $\langle +pl \rangle$ の素性を付加する。

一方、複合語が男性名詞となり、 P_2 が $\langle -human \rangle$ となる CS I は、(24)のように、語末に複数屈折が現れる。

(24) il capifuoco → i capifuochi/ il capogiro → i capogiri/ il capoletto → i capoletti/
il capoverso → i capoversi

(24)の *capogiri* の生成を記述すると、(25)のようになる。

(25)	Base	$[\text{capogir-}\alpha]_M$
	PFA	$[\text{capogir-}\alpha]_{M\langle +pl \rangle}$
	IR	$[\text{capogir-i}]_M$
	Op	$[\text{capogiri}]_M$

(25)で示したように、CS II は、(17)における単純語の PFA に条件付けられた複数形態を生成することになる。

従位構造を持つ $\langle \text{capo}+N \rangle$ 複合語は、主要部が *capo* にあるため複合語全体として、一般的に男性名詞となるが、複合語が $\langle +human \rangle$ を意味する場合、出力として女性名詞が形成されることが

ある。このような複合語の複数形態には、不変化となるもの(26a)と、語末に屈折が現れるもの(26b)が見られる。

(26) a. la capobranco → le capobranco/ la caposcalo → le caposcalo/ la capoclassifica →

le capoclassifica/ la capogabinetto → le capogabinetto/ la capostruttura → le capostruttura

b. la caporiona → le caporione/ la capostipite → le capostipiti

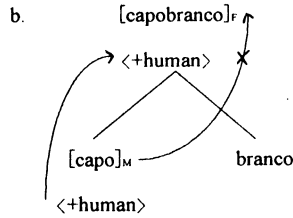
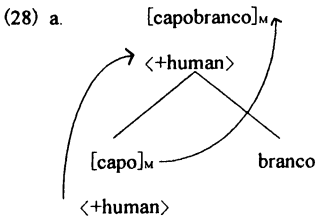
一方、これらに対応する男性名詞の複数形態は、(26a)に対して P_i に複数屈折が現れ(27a)、(26b)に対して語末に複数屈折が現れる(27b)。

(27) a. il capobranco → i capibranco/ il caposcalo → i capiscalo/ il capoclassifica →

i capiclassifica/ il capogabinetto → i capigabinetti/ il capostruttura → i capistruttura

b. il caporione → i caporioni/ il capostipite → i capostipiti

(26b)と(27b)は、CS II であるので、文法性に関係なく語末に複数屈折が出現する。これに対して、CS I である(26a)と(27a)では、複数形態の屈折位置が異なる。この複数形態の相違は、従位複合語における PFA に示される「主要部への複数素性付加」ということに起因すると思われる。これらの複合語の主要部が *capo* であると仮定すると、男性名詞においては、主要部の素性が完全に複合語へ透過されているが、女性名詞の場合、一部の素性が透過されていない。



例えば、文法性の語彙素性と<+human>という統語素性において、*capobranco* を例に示すと、(28)のように、男性名詞は、*capo* の素性が複合語に透過されているが、女性名詞は、文法性を素性透過していないことが分かる。主要部の決定要因²⁰⁾の一つである文法性の素性透過が行われていないという点で、(28b)の女性名詞の *capo* は、主要部とならない。しかし、統語素性や意味²¹⁾において素性透過が行われていることから、*capo* は、文法性の要因が不足した主要部であると言える。このことから、文法性の要因を素性透過させるために、語形成規則における派生規則により、*capo* に女性の語彙特性を表すゼロ接辞が付加され女性名詞が生成されると仮定して、複数形態の生成について考えていくことにする²²⁾。語彙特性を示すゼロ接尾辞の導入によって、女

性名詞 *capobranco* の生成を記述すると, (29) のようになる。

- (29) Base $[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{branc-}\alpha]_M$
 DR $[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}^{27}]_F, [\text{branc-}\alpha]_M$
 CR $[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F + [\text{branc-}\alpha]_M]_F$
 PFA $[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F \langle +pl \rangle + [\text{branc-}\alpha]_M]_F$
 IR $[[[\text{cap-o}]_M + \phi_{\Delta MF}]_F + [\text{branc-o}]_M]_F$
 Op $[\text{capobranco}]_F$

語基である $[\text{cap-}\alpha]_M$ は, 派生規則により女性名詞を作るゼロ接尾辞を付加する。このゼロ接尾辞は, 素性を変換するものであり, 他の接尾辞のように語彙範疇を変えるものではない。このことから, $[\text{cap-}\alpha]_M$ の $-\alpha$ の形態素性は保持される。このように派生規則により主要部となった $[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F$ は, PFA により, $\langle +pl \rangle$ の素性を付加する。この $\langle +pl \rangle$ の素性が付加されるのは, P_1 における主要部であるゼロ接尾辞であり, 語幹部分である $[\text{cap-}\alpha]_M$ には, 複数の素性は付加されない。この結果, 出力として, 不変化の形態が現れると考えられる。このようなことから, 主要部に複数素性を付加するという従属複合語の PFA は, 有効となる。一方, (26b) における CS II は, 初めから辞書に登録されているため, 単純語と同様, 語末に複数屈折が起こる。*caporiona* が *caporione* から派生して生成されていることは, *caporiona* における P_2 の要素である *rona* が単独では存在していないことから類推できる。

- (30) Base $[\text{caporion-}i^{24}]_N$
 DR $[\text{caporion-}\chi]_F$
 PFA $[\text{caporion-}\chi]_F \langle +pl \rangle$
 IR $[\text{caporion-e}]_F$
 Op $[\text{caporione}]_F$

4.2.2. P_2 : $\langle +human \rangle$

次に, P_2 が $\langle +human \rangle$ の統語素性を示す複合語は, P_1 の *capo* も $\langle +human \rangle$ の意味を持つことから, 複合語全体として, 等位複合語(*composti coordinazione*)²⁵⁾を形成することになる。このような種類の $\langle \text{capo} + N \rangle$ 複合語に関して, Benedek(1978)²⁶⁾では, 構成要素の機能が同格関係にあるため, *capo* は P_1 にも P_2 の位置の何れにも現れるとし²⁷⁾, 何れの位置においても *capo* は限定語(*determinante*)²⁸⁾となることを述べている。また, *capo* がこのように主要部でない修飾部の機能を持

つことから, *capo* は不変化となり, 複数屈折は, 主要部である P_1 に起こるとしている。しかしながら, 実際には, このように P_1 に複数屈折が出現するものは, 後述するように, CS II であり, 生成的な複合語の複数形態は, P_1 と P_2 の両方に屈折が起こる。このようなことから, 等位複合語においては, Scalise(1994: 133)が, "non è possibile identificare un elemento modificato ed un elemento modificatore, ma entrambi i costituenti sono contemporaneamente modificati e modificatori"「修飾される要素と修飾する要素を見分けることはできないが, それぞれの構成要素は同時に修飾部・被修飾部となる」と指摘しているように, 主要部の特定が不可能な構造となる³⁰⁾。このような内部構造を持つ等位複合語において, CL の男性名詞は, *capo operaio* → *capi operai* のように, 複数の屈折形態が複合語の両方の要素に現れる。このことから, 等位複合語における PFA は, (31) のように規定することができる。

- (31) <N+N>の語彙範疇からなる複合名詞が等位複合語である場合, 両方の要素に<+pl>の素性を付加する。

これに従って, *capi operai* の生成過程を記述すると, (32) のようになると考えられる。

- (32) Base [cap-α]_M, [oper-χ]_F
 DR [cap-α]_M, [[oper]_F+ai-α³⁰⁾_{ANN}]_M³¹⁾
 CR [[cap-α]_M##[[oper]_F+ai-α_{ANN}]_M]_M
 PFA [[cap-α]_{M<+pl>}##[[oper]_F+ai-α_{ANN}]_{M<+pl>}]_M
 IR [[cap-i]_M##[[oper]_F+ai-i³²⁾_{ANN}]_M]_M
 Op [capi operai]_M

(32)では, 複合語規則によって生成された[[cap-α]_M##[[oper]_F+ai-α_{ANN}]_M]_M が, PFA によって複数素性を P_1 と P_2 に付加し, 複数形態 *capi operai* を生成している。次に, 等位構造を示す CS の男性名詞には, (33) のような複数形態が見られる。

- (33) a. il capobandito → i capibanditi/ il capocannoniere → i capicannonieri/ il capocarceriere → i capicarcerieri/ il capofacchino → i capifacchini/ il capogabbiere → i capigabbieri
 b. il capocomico → i capocomici/ il capomacchinista → i capomacchinisti

(33a)は, CL と同様, 各要素に複数屈折が現れる CS I であり, (33b)は, 初めから辞書に記載されているため, 語末に複数屈折が現れる CS II である。CS I の *capicannonieri* と CS II の *capocomici* の複数生成過程を記述すると, (34) のようになる。

(34) a. Base	$[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{cannon-}\beta]_F$	b. $[\text{capocomic-}\eta]_N$
DR	$[\text{cap-}\alpha]_M, [[\text{cannon}]_F + \text{ier-}\beta_{\text{ANN}}]_M$	$[\text{capocomic-}\alpha]_M$
CR	$[[\text{cap-}\alpha]_M + [[\text{cannon}]_F + \text{ier-}\beta_{\text{ANN}}]_M]_M$	ϕ
PFA	$[[\text{cap-}\alpha]_{M(+P)} + [[\text{cannon}]_F + \text{ier-}\beta_{\text{ANN}}]_{M(+P)}]_M$	$[\text{capocomic-}\alpha]_{M(+P)}$
IR	$[[\text{cap-i}]_M + [[\text{cannon}]_F + \text{ier-i}_{\text{ANN}}]_M]_M$	$[\text{capocomic-i}]_M$
Op	$[\text{capicannonieri}]_M$	$[\text{capocomici}]_M$

(34a)では、語基である $[\text{cap-}\alpha]_M$ と $[\text{cannon-}\beta]_F$ が派生規則と複合語規則により $[[\text{cap-}\alpha]_M + [[\text{cannon}]_F + \text{ier-}\beta_{\text{ANN}}]_M]_M$ を生成する。そして、等位複合語のPFAによって、両方の要素に $\langle +P \rangle$ の素性を付加する結果、出力として capicannonieri が現れる。一方、(34b)では、語基である $[\text{capocomic-}\eta]_N$ が派生規則で素性を $-\alpha$ に変換し、PFAで $\langle +P \rangle$ の素性が付加されるため、語末に屈折形態を持つ capocomici を生成する。

このような男性名詞における複数形態生成に対して、等位構造を示す複合語が女性名詞となるものには、(35)のような複数形態がある。

- (35) a. $\text{la capo-crocerossina} \rightarrow \text{le capo-crocerossine}$
b. $\text{la capocronista} \rightarrow \text{le capocroniste} / \text{la caporedattrice} \rightarrow \text{le caporedattrici}$
c. $\text{la capocomica} \rightarrow \text{le capocomiche} / \text{la capomacchinista} \rightarrow \text{le capomacchiniste}$

(35a)は、CLであり、(35b)は、CS Iであり、(35c)は、CS IIである。これらの複数屈折は、表層として、すべて P_2 に起こっている。しかしながら、生成過程の相違により、内部構造はそれぞれ異なると考えられる。語形成規則によって生成されるCLの capo-crocerossine の生成を記述すると、(36)のようになる。

(36) Base	$[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{croceross-}\chi]_F^{33)}$
DR	$[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\text{AMF}}]_F, [[\text{croceross}]_F + \text{in-}\chi_{\text{ANN}}]_F$
CR	$[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\text{AMF}}]_F \# \# [[\text{croceross}]_F + \text{in-}\chi_{\text{ANN}}]_F]_F$
PFA	$[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\text{AMF}}]_{F(+P)} \# \# [[\text{croceross}]_F + \text{in-}\chi_{\text{ANN}}]_{F(+P)}]_F$
IR	$[[[\text{cap-o}]_M + \phi_{\text{AMF}}]_F \# \# [[\text{croceross}]_F + \text{in-e}_{\text{ANN}}]_F]_F$
Op	$[\text{capo-crocerossine}]_F$

(36)では、語基である $[\text{cap-}\alpha]_M$ が派生規則におけるゼロ接尾辞付加によって女性の統語素性を持つ。従って、等位複合語のPFAが適用されても P_1 には複数屈折が起こらず、結果的に P_2 だ

けに屈折が起こったような形態が出力される。一方、(35c)における CS II の *capocomiche* は、語彙化されているため、(34b)の *capocomici* の生成過程と派生規則における形態素性が異なるだけで、同じ規則適用を受けることになる。

(37)	Base	[capocomic-η] _N
	DR	[capocomic-χ] _F
	PFA	[capocomic-χ] _{F<+pl>}
	IR	[capocomic-e] _F
	Op	[capocomiche] _F

5. 結語

〈capo+X〉複合語における複数形態の複雑さは、語彙化、複合語の機能構造、文法性、という三つの問題が重複して生じていることに起因する。語彙化という問題に関しては、複合語の生成過程の相違から、語形成規則により生成される生成複合語(CL/CS I)と辞書に登録されている語彙複合語(CS II)を区別する必要がある。生成複合語と語彙複合語には、明確な内部構造の相違が存在することから、語彙部門内における生成構造が全く異なる。複合語の機能構造では、構成要素における機能関係から、従位複合語と等位複合語に区別される。〈capo+N〉における従位複合語では、主要部が *capo* となるのに対して、等位複合語では、構成要素が同格的関係にあることから主要部の位置が特定することができない。このような複合語における機能関係を、本稿では、「複数素性付加に関する条件」として語形成規則に設定し、屈折規則での複数屈折の出現を可能にさせている。ここで、まとめて「複数素性付加に関する条件」を示しておく。

〈Condition on Plural Features Assignment〉

- i) 単純語の名詞の場合 : 語に〈+pl〉の素性を付加
- ii) 〈N+A〉複合名詞の場合: 主要部である N, そして A の要素に〈+pl〉の素性を付加
- iii) 〈N+N〉複合名詞の場合: A) 従位関係であれば、主要部に〈+pl〉の素性を付加
B) 等位関係であれば、両方の要素に〈+pl〉の素性を付加

複合語の文法性に関しては、特に、女性名詞となる場合に、主要部である *capo* に語彙素性を変換するゼロ接尾辞の付加ということを提案した。ゼロ接尾辞は、従位複合語における主要部 *capo* と複合語全体の文法性の一致や、等位複合語における *capo* と P₂ との語彙範疇の連鎖の必要性

によって理解することが可能である。

このような生成構造，複合語の機能構造，文法性に基づいて，〈capo+X〉複合語の複数形態の生成を，本稿で扱った語形成規則によって記述すると，次のようになる。

A) 語彙複合語

$$i) \quad [\text{capoP}_2]_N \rightarrow [\text{capoP}_2\text{-Infl}]_N$$

$$\text{Base} \quad [\text{capoP}_2]_N$$

$$\text{PFA} \quad [\text{capoP}_2]_{N(\text{+pl})}$$

$$\text{IR} \quad [\text{capoP}_2\text{-Infl}]_N$$

$$\text{Op} \quad [\text{capoP}_2\text{-Infl}]_N$$

B) 生成複合語

$$ii) \quad [[\text{capo}]_M + [\text{P}_2]_A]_M \rightarrow [\text{capi} + \text{P}_2\text{-Infl}]_M$$

$$\text{Base} \quad [\text{cap-}\alpha]_M, [\text{P}_2]_A$$

$$\text{CR} \quad [[\text{cap-}\alpha]_M + [\text{P}_2]_A]_M$$

$$\text{PFA} \quad [[[\text{cap-}\alpha]_{M(\text{+pl})} + [\text{P}_2]_{M(\text{+mas}/\text{+pl})}^{34}]]_M$$

$$\text{IR} \quad [[\text{cap-i}]_M + [\text{P}_2\text{-Infl}]_A]_M$$

$$\text{Op} \quad [\text{capi} + \text{P}_2\text{-Infl}]_M$$

$$iii\text{-}a) \quad [[\text{capo}]_M + [\text{P}_2]_N]_M \rightarrow [\text{capi} + \text{P}_2]_M$$

$$\text{Base} \quad [\text{cap-}\alpha]_M, [\text{P}_2]_N$$

$$\text{DR}$$

$$\text{CR} \quad [[\text{cap-}\alpha]_M + [\text{P}_2]_N]_M$$

$$\text{PFA} \quad [[[\text{cap-}\alpha]_{M(\text{+pl})} + [\text{P}_2]_N]_M$$

$$\text{IR} \quad [[\text{cap-i}]_M + [\text{P}_2]_N]_M$$

$$\text{Op} \quad [\text{capi} + \text{P}_2]_M$$

$$\text{-}b) \quad [[\text{capo}]_F + [\text{P}_2]_N]_F \rightarrow [\text{capo} + \text{P}_2]_F$$

$$[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{P}_2]_N$$

$$[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F, [\text{P}_2]_N$$

$$[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F + [\text{P}_2]_N]_F$$

$$[[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F(\text{+pl}) + [\text{P}_2]_N]_F$$

$$[[[\text{cap-o}]_M + \phi_{\Delta MF}]_F + [\text{P}_2]_N]_F$$

$$[\text{capo} + \text{P}_2]_F$$

$$\text{-}c) \quad [[\text{capo}]_M + [\text{P}_2]_M]_M \rightarrow [\text{capi} + \text{P}_2\text{-Infl}]_M$$

$$\text{Base} \quad [\text{cap-}\alpha]_M, [\text{P}_2]_M$$

$$\text{DR}$$

$$\text{CR} \quad [[\text{cap-}\alpha]_M + [\text{P}_2]_M]_M$$

$$\text{PFA} \quad [[[\text{cap-}\alpha]_{M(\text{+pl})} + [\text{P}_2]_{M(\text{+pl})}]]_M$$

$$\text{-}d) \quad [[\text{capo}]_F + [\text{P}_2]_F]_F \rightarrow [\text{capo} + \text{P}_2\text{-Infl}]_F$$

$$[\text{cap-}\alpha]_M, [\text{P}_2]_F$$

$$[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F, [\text{P}_2]_F$$

$$[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F + [\text{P}_2]_F]_F$$

$$[[[\text{cap-}\alpha]_M + \phi_{\Delta MF}]_F(\text{+pl}) + [\text{P}_2]_{F(\text{+pl})}]_F$$

IR [[cap-i]_M+ [P₂-Inf]_M]_M

[[[cap-o]_M+φ_{AMF}]_F+ [P₂-Inf]_F]_F

Op [capi+P₂-Inf]_M

[capo+P₂-Inf]_F

上記のような生成過程により、<capo+X>複合語の複数形態が形成され则认为られる³⁵⁾³⁶⁾。

ゼロ接尾辞の付加に関しては、*capo* などに特別に機能するものであると认为られるが、<capo+N>複合語以外の<N+N>複合名詞にも、PFA による複数素性付加や生成複合語と語彙複合語による複数形態の分析は有効であると思われる。

- * 本稿の執筆にあたり、国立音楽大学の Alda Nannini 先生にインフォーマントとしてご協力頂いた。ここに記して謝意を表したい。

註

- 1) *capitombolare/ capitozzare/ capovolgerel capovoltare* など、<capo+X>複合語の X の位置に動詞 (V) が現れ、複合動詞を形成するものが若干見られる。このような複合動詞は、すべて<capo+A/N>複合名詞に動詞接尾辞 -are/ -ere が付加してできた派生語である。
- 2) 英語と比較して、イタリア語複合語の非生産性を指摘したものとして、拙稿(1997a/ 1997b)がある。
- 3) *capo* が接頭辞でなく複合語要素である理由として、*capo* が主要部になることや名詞という語彙範疇を持つ点を挙げることができる。また、語幹(stem)ではないという理由として、他の語幹と複合語を作らないことや意味的に科学的複合語に限定されないということが挙げられる。
- 4) P₂ に *capo* が現れる複合語には、次のようなものがある。
 <不変化詞+capo> : *accapo*
 <V+capo> : *copricapo/ giracapo/ grattacapo/ rompicapo*
 <N+capo> : *consigliere capo/ impiegato capo/ redattore capo*
 これらは、*capo* が P₁ に現れる複合語と比べて、生産的ではない。
- 5) <capo+A/N>以外に、*capo* を含む複合名詞としては、<capo+前置詞+N>という構造がある。このような前置詞を含む構造も本稿で考察する複合語の分析に適応するが、これについては、紙幅の都合により、別の機会に述べることにする。
- 6)7) これらには、複合語が男性名詞となるものと、女性名詞となるものが存在する。(1d)のように不変化となるのは、女性名詞の場合で、男性名詞となる場合は、(1a)のように P₁ に複数屈折要素が現れる。*capibranco/ capiscalo*。
- 8) <capo+N>複合語を区別して扱わないために、複合名詞の複数形態の説明が非常に複雑になるということも見られる。Lepschy & Lepschy(1988)では、複合語における意味と機能から複数形態を説明しているが、<capo+N>複合語を他の複合名詞と同一に扱っているため、多くの例外を列挙するという形をとっている。
- 9) ここで分類した説明には、次のような先行研究が属する。①坂本(1979)、②Benedek(1978)/ Fogarasi(1983)、③Serrianni(1989)/ Dardano & Trifone(1985)。
- 10) *i caporioni* は、"chi è capo di un gruppo di persone disoneste, facinorose"「詐欺、暴力などを行う

- グループの長」の意味の場合であり, "capo di un rione"「行政地区の長」の意味の場合は, *icapirioni* となる。
- 11) 他の先行研究でもこのことは, 余り多く触れられていない。
 - 12) 語基の問題として, しばしば, 形態素と語の対立が取り上げられる。Anderson(1992: 69-71)/Hammond & Noonan(1988: 3-4)を参照。
 - 13) 本稿でのイタリア語語基の設定は, Zuffi(1981)に依るところが大い。Zuffi(1981)の他にも, Scalise(1994)では, Aronoff(1976)の「語に基づく形態論の仮説」を修正した抽象語(*parola astratta*)を語基として設定している。
 - 14) [libro]→[[libro]+aio]→[libraio]。
 - 15)16) *capinera* と *capirosso* の複数形態である *capinere* と *capirossi* における *capo* と *P₂* を連結している [-i]は, 複数形態素ではない。Rohlf(1969: 339)では, この[-i]を"una sorta di contrassegno compositivo"「一種の複合語の目印」とし, その起源は明らかではないということを述べている。また, Dardano(1978: 189)では, 外心複合語の幾つかのものに[-i]が見られることを指摘している。
 - 17)18) 形容詞における男性単数形態の語幹母音が-o である形態素性を-κ とし, -e であるものを-λ とすると, 形容詞に起こる屈折規則は, 次のように規定される(<+mas>と<-mas>は, それぞれ一致によって決定される男性素性と女性素性を示し, また, <+pl>も一致による数の素性を示す)。
- | | | | |
|-------|------------------------------------|---|--------------------|
| A) i) | [Ψ-κ] _{A<+mas/-pl>} | → | [Ψ-o] _A |
| ii) | [Ψ-κ] _{A<+mas/+pl>} | → | [Ψ-i] _A |
| iii) | [Ψ-κ] _{A<-mas/-pl>} | → | [Ψ-a] _A |
| iv) | [Ψ-κ] _{A<-mas/+pl>} | → | [Ψ-e] _A |
| B) i) | [Ψ-λ] _{A<+mas/-pl>} | → | [Ψ-e] _A |
| ii) | [Ψ-λ] _{A<+mas/+pl>} | → | [Ψ-i] _A |
- 19) 従位複合語は, Scalise(1994: 133)の"quelle parole composte i cui costituenti esibiscono rapporti interni identificabili in termini di Testa/ Complemento o di Testa/ Attributo"「構成要素が主要部・補部または主要部・限定部によって, 内部構造を示す複合語」の定義に準じている。従って, 原則的に内心複合語に対応するものである。
 - 20) イタリア語複合語における主要部は, 一般的に, 意味・語彙範疇・文法性などから決定される。
 - 21) Allen(1978)における"The IS A Condition"を *capobranco* に当てはめると, 男性名詞においても女性名詞においても"*capobranco* IS A *capo*"であることから, 意味的にも *capo* が主要部であると言える。
 - 22) 複合語規則で男性名詞が生成された後, 派生規則により女性名詞が生成されるという考え方も可能であるが, これは, 「拡大順序づけの仮説」に違反することになる。
 - 23) Δ の最初の M は, 接尾辞が付加される語彙範疇, 後ろの F は, 接辞付加された後の派生語の語彙範疇を示す。
 - 24) *caporione* などの生物名詞は, *ragazzo/a* などと同様, 語基として文法性を素性として持たないもので, 文法性は派生規則により付加されると思われる。このような生物名詞の語基が持つ形態素性を, -η(男性単数形態における語幹母音が-o)と-i(男性単数形態における語幹母音が-e)で示すと, 派生規則で生物名詞の形態素性は次のように変換される。

- A) i) $[\Psi-\eta]_M \rightarrow [\Psi-\alpha]_M$
 ii) $[\Psi-\eta]_F \rightarrow [\Psi-\chi]_F$
 B) i) $[\Psi-i]_M \rightarrow [\Psi-\beta]_M$
 ii) $[\Psi-i]_F \rightarrow [\Psi-\chi]_F$

- 25) ここでの等位複合語は、Scalise(1994: 134)に従い、構成素が、"concatenazione di due parole con categoria lessicale uguale e cioè dalla concatenazione di due nomi o di due aggettivi"「同じ語彙範疇の二つの語の連結であり、ゆえに二つの名詞、もしくは二つの形容詞の連結である」によって構成されている複合語を指す。
- 26) Benedek(1978)では、 $\langle \text{capo} + N \rangle$ 複合語における N が、同格的なものと補部(complemento)の機能を持つものの二種類に分類して分析を行っているため、同格的なものの中に、本稿で扱った P_2 が $\langle \text{-human} \rangle$ のものを含んでいる。
- 27) *capo* が P_1 と P_2 に現れる複合語の構造は、明らかに異なる。それは、*capo* が P_1 に現れる複合語が等位構造を示すのに対して、 P_2 に現れるものは、従位構造を示す。このため、*capo* が P_2 に現れる *impiegato capo/ redattore capo* の複数形態は、*impiegati capo/ redattori capo* であり、主要部である P_1 に屈折が起こる。
- 28) 限定語は、主要部に対する修飾部(modifier)に相当する。
- 29) 意味機能的には、等位複合語は主要部の位置が特定できないが、文法性などの側面から考えると、主要部は、イタリア語における一般的複合語と同様、左側の要素となる。例えば、 $\langle N + N \rangle$ 等位複合語である *poltrona letto* は、複合語全体として、女性名詞を示し、これは、 P_1 の *poltrona* の文法性に依存している。
- 30) 名詞接尾辞は、名詞と同様に、語末に形態特性を持ち、屈折規則が適用される。
- 31) $[\text{oper}-\chi]_F$ の派生規則は、正確には、接尾辞 *-aio* が生物名詞と同じ形態素性を持つため、まず、 $[[\text{oper}] + \text{ai}-\eta_{\text{ANN}}]_M$ が男性という文法性を持つことにより、素性変換が行われ $[[\text{oper}] + \text{ai}-\alpha_{\text{ANN}}]_M$ を生成すると考えられる。
- 32) 複数形態素 $\{-i\}$ は、再調整規則(Readjustment Rules)によって音韻的に脱落するが、ここでは、再調整規則を省略して記述している。
- 33) *Croce Rossa* は、固有名詞であるため、辞書に登録されていると考えられる。
- 34) 形容詞要素に付加する $\langle +\text{mas} + \text{pl} \rangle$ という素性は、名詞との一致によるものである。厳密には、このような一致現象が PFA で生起するとは考えにくいだが、ここでは、便宜上、PFA で付加する記述方法をとる。
- 35) 複数形態が二種類以上存在する複合語は、生成複合語と語彙複合語が話者により混在するような場合に起こると考えられる。例えば、男性名詞 *capotreno* には、*capitreno* と *capotreni* の二種類存在するが、*capitreno* は、語形成規則によって生成されているため複数屈折が主要部である *capo* に起こり、一方の *capotreni* は、初めから辞書に登録されているために、語末に複数屈折が出現している。
- 36) 本論で示した $\langle \text{capo} + X \rangle$ 複合語で生成されないものとして、従位複合語で両方の要素に屈折が起こる *capilavoril capilugohi* などがある。これらは、同時に P_1 に複数屈折が現れる複数形態を持つ。このような複合語は、「語彙化の過程」において出現する形態と考えている。詳しくは、拙稿(1996)を参照。

参考文献

- Allen, Margaret Reece. 1978. *Morphological Investigations*. PhD Dissertation, University of Connecticut.
- Anderson, Stephen R. 1992. *A-Morphous Morphology*. Cambridge University Press.
- Aronoff, Mark. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. MIT Press.
- Benedek, Nándor. 1978. *Sostantivi composti nell'italiano contemporaneo*. *Lingua Nostra* 39:4. pp.117-121.
- Dardano, di Maurizio. 1978. *La formazione delle parole nell'italiano di oggi*. Bulzoni Editore.
- Dardano, di Maurizio & Pietro Trifone. 1985. *La lingua italiana*. Zanichelli.
- Fogarasi, Miklós. 1983. *Grammatica italiana del novecento: Sistemazione descrittiva*. Bulzoni Editore.
- Hammond, Michael & Michael Noonan. 1988. *Morphology in the Generative Paradigm*. In *Theoretical Morphology: Approaches in Modern Linguistics* (M. Hammond & M. Noonan eds.). pp.1-19. Academic Press.
- Lepschy, Anna Laura & Giulio Lepschy. 1988. *The Italian Language Today*. New Amsterdam.
- Renzi, Lorenzo, Giampaolo Salvi, & Anna Cardinaletti. 1995. *Grande grammatica italiana di consultazione: III. tipi di frasi, deissi, formazione delle parole*. Il Mulino.
- Rohlf, Gerhard. 1969. *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti: Sintassi e formazione delle parole*. Piccola Biblioteca Einaudi.
- Scalise, Sergio. 1990. *Morfologia e lessico: Una prospettiva generativista*. Il Mulino.
- . 1994. *Le strutture del linguaggio: Morfologia*. Il Mulino.
- Serianni, Luca. 1989. *Grammatica italiana: Italiano comune e lingua letteraria*. UTET.
- Zuffi, Stefano. 1981. *The Nominal Composition in Italian Topics in Generative Morphology*. *Journal of Italian Linguistics* 2. pp.1-54.
- 坂本鉄男. 1979. 『現代イタリア語文法』. 白水社.
- 上野貴史. 1996. 『イタリア語における《N+N》複合語の生成: Head と語形成レベル』. 言語文化学会論集 第7号. pp.21-42.
- . 1997a. 『英語名詞複合語とイタリア語表現』. NIDABA 26 (西日本言語学会編). pp.77-85.
- . 1997b. 『イタリア語複合名詞と英語表現』. 大阪女子短期大学紀要 第22号. pp.43-50.
- . 1998. 『語彙部門におけるイタリア語複合語: 「名詞＋形容詞／形容詞＋名詞」複合語から』. ロマンズ語研究 31.